

銀色の魚

岡本俊弥

老人は騒がしい孫たちと、古びた門をくぐった。

長い間、門の扉は閉ざされていた。いつか再び開かれることがあると、希望的な観測のもとに封印されたのだ。荒らされることがないよう埋められていた。

結局、建造者たちの望みは叶えられなかった。

自分の一生のうちに暴かれてしまうとは。

老人は慨嘆したが、考えてみれば、この門のことなど忘れ果てていた。盗掘がなければ、死ぬまで思い出さなかっただろう。

通路は地下へと続いている。灯を掲げて壁をたどりながら下っていく。

すると、開けた場所に出た。天井まで、大人の背の高さを優に越えるほどもある空

間だ。

薄暗い灯りに照らされ、「本」がびっしりと積み上げられていた。むき出しの岩盤ではなく、床には木の板が敷き詰められている。湿気を防ぐための工夫かもしれないが、空中には湿り気がありカビの匂いが漂っていた。

本の塔は何カ所かで倒され、本が床に散乱している。紙がちぎれ、ばらばらになったものもある。侵入者の狼藉だったが、本は期待外れだったのだろう。

盗賊の姿は既になく、戻ってくることもない。何が収められていたのか知られた後では、訪れる者は稀だった。

手近なものを手に取り、ばらばらとめくる。模様のようなもので埋まっていた。もう一つ手に取って、適当に開いてみる。

同じことだった。

老人に判読できる文字は、一語も、一字もない。

*

煌びやかな夜空だ。流れ星が夜空を横切るたびに歓声が上がる。街灯が少なく、ふだんはひと気のない深夜の公園に、家族連れの男女が集っていた。

なんでこんなにいるんだ、ヒマを持って余してやがる。

亮輔はぶつぶつと呟きながら、公園の横を通り過ぎた。仕事が終わったのは十時を過ぎたころだ。亮輔の仕事は変形労働制で、夏と冬の繁忙期には就業時間が延びる。連日の残業をこなしても、手当は付かない。年間通せば定時帰宅と同じだからと聞いても、なかなか納得できない仕組みだった。

時間は夜半に掛かろうとしている。

「ご記憶かと思いますが、昨年、大型の彗星が地球に接近しました。そのときのなごりが、太陽の周りを巡る地球の軌道に残っていて、いま流星群となって帰ってきたのです」

けさのニュースは伝えていた。

「彗星を起源に持つダスト・トレイルと呼ばれるもの、航跡のようなものです。そ

こには流星の種が、濃密に含まれています。雨のように星が降る様子を、見ることができるかも知れません。月もなく、絶好の観測日和です。お住まいの空を見て、晴れているようでしたら、ぜひ夜空に眼を向けてください」

おれには関係ない話だ。朝が早いし夜は遅い。空を見てる時間なんてない。亮輔は不愉快に思った。

しかし、自宅のマンションが見えたとき、ふと足を止め空を見上げた。長い光の尾を引く火球が夜空を横切った。

ふつう、流れ星は夜空に白い線が一瞬引かれ、すぐに消えていく。白は、星間物質が大気で燃え尽きる高温を意味している。ところが、その日は軌跡が蒼い光を放っていた。

なんで蒼なんだ、こんなふうに見えるものなのか。

暗い夜空全体が、サーチライトに照らされたような、見知らぬ光に満ちていた。ふだん闇に沈む建物のシルエットが、くつきり見えるほどだった。

茫然とした顔で亮輔は手をかざし、頭上を眺め透かしていた。

翌朝、いつも通りのウエイクアップ音で目覚めると、亮輔はスピーカにニュースをリクエストした。出勤前、身支度をする合間の習慣だった。

スピーカは、ニュースを読み上げ始めた。

朝食を食べながら聞き流すだけなので、いつも真剣に耳を傾けはしない。だが、奇妙なことに気がつく。ニュースはけさのものではなく、昨夜の最終ニュースなのだ。スピーカは複数サイトのニュースを順番に流す。ラジオ番組の流用が大半なので、時差は多少あっても、朝に昨日の番組が流れたことはない。

再度リクエストしても同じだった。

亮輔はあきらめると、携帯端末に触れてニュースサイトを開こうとした。

何かがおかしかった。

見慣れた画面のはずなのだが、何が映っているのか分からないのだ。アイコンらしきものに交じって、模様のようなものが画面に表示されている。

目を凝らしても、それが何かは理解できなかった。

こわれてるのかな。

ホーム画面もおかしかった。アイコンが見分けられない。一番上にあった時計は、見慣れない記号の羅列に変わっている。

なんだろう、端末が故障したのか。

亮輔はいやな予感がした。まだ買って一年足らずなのに、もう故障なのか。不安を覚えたが、時刻だけならスピーカが代わりに読み上げてくれる。

出かける時間を過ぎていた。

慌てて朝食を片付けると、亮輔は部屋を飛び出す。

駅までの通勤路は、昨日までとどこか違っていた。風景は同じだが、駅をめざす通行人の様子が変わっていた。

亮輔のワンルームマンションから駅まで、徒歩で十五分ほどかかる。バス通りに出ると、歩道は駅に向かう群衆で溢れている。通勤時間帯だ。いつもなら、だれもが片手に端末を持って、ときどき画面をのぞきながら歩く。

今日は、手に持った端末を見るものが少ないのだ。

駅では改札口が閉じられ、付近に多くの男女が立ち尽くしていた。ざわめきは聞こえず、黙りこんでいるのが異様だった。列車は動いていないようだった。

そこで、亮輔は駅のおかしさの理由を知る。

駅名を掲げている看板がない。昨日まで行き先表示があった場所には、でたらめに書き付けられた落書きのようなものしかない。

そういえば、駅前の商店の看板も変わっていた。飲食店や不動産屋など、大半がシヤッターを下ろしたままの商店から名前が消えている。

文字がない。

亮輔は突然気づく。どこにも、字がないのだ。

突然、端末から着信音が流れる。発信者名が表示されているはずだが、判読できなかった。グラフィックがこわれたままだ。

受話はどこを押したっけ。

亮輔は焦ったが、とりあえず画面を適当に押した。

「もしもし、亮輔。つながってる、聞こえてる？」

「あ、ああ、聞こえる」

亮輔は聞き慣れた声に、少し安心する。

「わかる？ 杏美よ、きょうみ」

「もちろん、分かる」

「こっちの電話番号って、ちゃんと表示されてる？」

「いや、声で分かった」

「ふん、こわれてんのね」

「そっちは」

「読めない」

「同時にこわれるなんて、そんなことがあるのか」

「端末は生きてるみたいだけど、表示だけおかしいみたい」

「杏美はどうやって電話したの」

「亮輔の写真がアイコンになってるからね」

杏美のアドレス帳には、名前とともに顔写真が載っている。文字やアイコンはぐし

やぐしゃでも、写真はちゃんと残っているようだ。

「ところで亮輔、今どこ」

「駅前。電車は動いてないようだけど」

「何か、気がついた」

「よく分からないんだけど、いろんな表示がなくなってる」

「やっぱりそうか」

「そっちも」

「こっちも」

「どういうこと」

「知らない」

はあ、と亮輔はため息をつく。これじゃ会社には行けない。電話しようにも、アドレスの何番目に会社があったのかなんて憶えちゃいない。

「ところで亮輔、いま何かメモできるものある？」

「あ、手帳がある」

「出してみて」

バッグに手を入れて、社用の手帳を出した。

「で、どうすんの」

「書いてみて、自分の名前でも何でもいいから」

「なんでそんなことを」

「いいから、黙って書いて」

「わかった」

バッグを小脇に抱えて、手帳を広げるとボールペンをノックする。手帳はほとんど使われていない。亮輔は手書きが苦手で、メモをあまり取らないのだ。

名前ね、なんで名前を。

だが、書けなかった。

名前、亮輔という言葉は出てくるのだが、文字が思い浮かばない。自分の名前ぐらい自動的に書けるはずなのに、手がまったく動かない。

え、これは。

手帳に書いたあった過去の走り書きも、一切読めなかった。

「まさか、それじゃ」

「そうだよ、こわれたのは端末や看板じゃない」

杏美は、朝起きた後、すぐに異変に気がついたと言った。時計の文字盤が読めなくなっていたからだ。

デジタルの数字だけじゃない、アナログ時計の針から時刻を読むのも苦勞した。ただ、じっと凝視つめることで何とか解明できた。

亮輔は疑問を口にする。

「でもアナログって文字じゃないでしょ。なんでかな」

「時計も記号の一種だからかもしれないね」

「……って、どういう意味」

杏美は新聞を取っている。届いてはいたが、どの面もランダムな模様にしが見えなかった。

「よく届けてくれたよね、どうもけさから現象が始まっていたようだから」

杏美はTVをつけた。だが、番組は止まっていた。局によっては、アナウンサーが通常の放送ができない旨を繰り返していた。理由は告げられない。

「混乱してたんだね、まだ」

次にパソコンを立ち上げてみたのだが、アイコンも文字も見慣れぬものになり果てていた。

「それから知り合いに通話をかけまくった、アイコン押すだけだから」

顔写真がアイコンだったことが幸いしたのだ。

「みんなパニックってたね。聞いた相手みんなが同じだった。物理的に変わったわけじゃないとようやく分かった。読めなくなったのは、わたしなんだってね。というか、わたしだけじゃない、みんながね」

「って、どういうこと」

亮輔は、早口でしゃべる杏美に、ようやく口をはさんだ。

「真相はわからない」

まあそうか、亮輔は電話を片手にうなづく。

「杏美の家に行ってもいいかな、会社には行けそうにないし」

「うん。来るんなら、できるだけ食料を買い込んで来て」

「あ、ああ」

杏美の家は二駅歩いた先にある。途中のコンビニはあまり混んでいなかったが、支払いに行列ができていた。タグが通っても、店員がレジをうまく打てないのだ。POSはカードしか受け付けなかった。自信なげな操作を見ると、それも正常に処理されたのか怪しい。適当に勘で押している。ディスプレイに表示されるメッセージが読めないのだ。

この先まづいかも知れない。亮輔は、もっと買ってあげばと悔やんだ。

「どうなるんだろう」

杏美の部屋は、同じワンルームでも少し広い。IT企業勤務で稼ぎがいいからだ。

そうでもなけりゃブラック業界に勤めてられないよ、と居酒屋でグチを聞いたのが、杏美と付き合いだすきっかけだった。

部屋には持ちきれないほどレジ袋が積まれていた。近所を総ざらえしたと、杏美は

自慢げに言った。

さしあたりできることはなかった。

端末が使えないとなると、部屋でTVを見るだけだ。

チャンネルが読めないので、適当にザッピングする。あらためて見ると、文字を欠くりモコンは別ものようだった。

アナウンサー席だけを映す局があった。アナウンサーは居たり居なかったりしたが、それでもときどき誰かが座って、ニュースらしきことをしゃべった。

交通機関の混乱と、放送番組の不具合、政府の対応状況が不確かな情報として断片的に伝えられる。だが、肝心の文字がなくなったことに言及がなかった。ニュース原稿は、たぶん作られていない。アナウンサー自身の伝聞を話すだけなので、自信のないアドリブになる。

杏美が言う。

「なんだか、締まらない話し方だよね」

「仕方ないさ」

「かも知れないけどさ」

「電車とかいつ動くんだろ、あ、いや字が先かな」

「分からないね、判断材料がないもの。でもこのままだとすると、大変なことになる」
「いまでも大変だけど」

「うーん、表面的なことじゃなくて、社会全体の話だけどね」

こういうことにかけては、杏美のほうが論理的に考える。いろんな本を読んでいるようだ。

「社会システムは文字でできてるんだよ。法律は文字で書かれている。亮輔もわたしも、自分を証明できる書類は全部文字でしょ。書いてあるものだけじゃなくて、コンピュータの中のファイルもプログラムもソースは文字、数字も文字。いまは自動で動いているから、電気にしても水道にしても使えるけど、メンテナンスの手順書も図面も文字。いつか大きな不具合が出ると、もう直せなくなる。そのうち完全に止まるよ」
「水道なんて、人がバルブを開け閉めするだけじゃないの」

「いまどき機械がするでしょ。インフラはね、制御システムとセンサーでできてるの」

よ。だったらプログラムが必要になる」

「目盛りの数字も読めないんじゃない、もう人間には無理か」

「それどころかモノが買えなくなるよ。商売は数字のかたまりだから。発注数量や在庫数量、売り上げから仕入れからのお金の数字、残高、売り掛け金や手形、為替、伝票も読めないんだし」

「どうということ」

「給料が出なくなる」

「そりゃ困る」

「だって亮輔、働けないじゃない。あなた経理だったか総務だったかなんでしょ。数字が読めなくてどうすんのよ」

「ああ……困るな」

「わたしもコーディングなんで無理だね。生産性ゼロになる。働けない、つまり給料はない」

亮輔は頭を抱える。

「真剣に困る。貯金だつて、つて引き出せないのか」

「コンビニATMで試してみた。でもね、頭に中にあるイメージとディスプレイとが結びつかない。押ししてるうちにエラーになったと思う。それすら分からない。音声メッセージが言つてたからそう思うだけ」

「現金はほとんどないよ。引き出せないんじゃ」

「銀行にいくらあるのか憶えてるの」

「ああ、……いやATMで見ないと、つて無理なのか」

「どうしようもないよ」

沈黙が続き、しばらく経ってから亮輔は思い付いたように言う。

「変だな。口で言えるのに読めない書けないなんて。言えるつてことは、知ってるつてことだろ。忘れたわけじゃない。知ってるのに書けない」

「頭のケガや病気で、そういう症状になることがある。見た目正常なのに、書こうとすると手が動かなくなるとかね」

杏美はいきなり饒舌にしゃべりはじめる。

「人間の脳にはね、言語を司るハードウェアが入ってるのよ。昔からブローカ野やウエルニツケ野が関係すると言われてたし、いまでもその周辺を加えた複合的な領域が、言語の発話や理解に関係していると考えられている。文法や単語の記憶、アクセントやイントネーション、意味の理解とかの機能が分担されてる。つまり、人間には先天的に言葉を話したり聞いたりするハードが備わっているわけね。ところが、文字となると違う。特定の脳の部位が、文字の理解で機能してるとはいえない。学校とかの学習によって、視覚を含む脳のさまざまな信号の流れが形成され、後天的に作り上げられたと考えられているのよね。ある意味、ソフトウェアなの」

「よくそんなむずかしいこと言えるね」

「受け売りよ、本に書いてあった」

「ははあ、でもソフトウェアってどういうこと」

「今回の障害は脳のソフトウェアがハッキングというか、破壊された結果だと思うのよ」

「おいおい、ハッキングって誰か犯人がいるってのかい」

「うーん、でも人間わがじじゃないね」

「ソフトがこわれるとどうなる」

「たとえばね、文字理解の能力には、アルファベットや漢字が分かるだけじゃなく、記号と意味を結びつける抽象化の力も含まれている。プラス記号は単なる十字だけど、それを足し算や、気温のプラスに見立てるには文字理解と同等の能力が必要になる。時計の針の位置、端末やパソコンのアイコンで意味がわかるのも同じだよ」

時計を指さす。

「時間がなくなったわけでもないのに、ハードウェアの時計との結びつきを失う。デジタル時計は全く理解できない、アナログ時計は数分間睨みつけて、おぼろげに理解できる。それも、人によるかも。理解がこわされた深さは、アナログなものの方がちよつと軽く、抽象的なものほど大きいと思う」

「世の中標識だらけなのに、見たものと知っていることが、結びつかないとすると」
「苦しいね」

「でも、何が原因なんだ。おれ、頭にケガなんかしてない」

「亮輔に限らずだよ、みんな同時にケガするわけないでしょ」

「あれ、それじゃきのうの流星が原因かも。おれも見たし、みんなも見てるし。光が変だった、なんだか蒼い色で、ぶきみでぞっとして」

「天文現象の光や色と関係があるとすると、視覚から何かが入ってくるわけだから、としても……わたしは見てないんだよね。きのうは風邪でしんどかったから、さっさと寝てた。同じじゃないよ」

「そうか、残念」

「まあわたしが気がつく程度の原因だったら、すぐに解決されるだろうけど」
しゃべっているうちに一日は終わった。

二人はまだ話し合えたから良かったが、情報がないまま孤立した多くの市民には不安が広がった。外を歩くだけで、平穏さが失われていることが分かった。

政府の要請を受けて、二日後から交通機関が再開された。都心は大半の乗り物がキヤッシュレスで乗車できる。エラーが出ない限り、いつも通り改札できた。列車やバスの速度や運行時間は確認できず、駅名は読めなかったが、まだ乗務員の勘で対応が

可能だった。

平静にいつも通り生活を続けるよう、政府高官はTV画面で呼びかけた。現象は世界的なもので、自助努力でしか解決がないと述べた。文書はなかったが、録画や録音は可能だったから、なんとか恰好だけはつけていた。高官は終始無表情なままだった。聞いていた大衆には安心感が伝わらず、どうしようもないという諦観だけが残った。

文字のない世界は、すぐにさまざまな破綻を生み出していった。

そもそも、出社しても仕事がないのだ。書類もパソコンも無意味になっている。杏美の言うとおり、何一つできることがない。管理職は口頭の決済を出し渋った。復旧したときに、責任を問われると思ったのだろう。亮輔はかかってくる電話の応対で、何もわからないと繰り返した。会社に居て、何か作業をしていると不安がいくらか紛れた。

物流が滞り始めた。何をどこに運ぶかで、間違いが頻繁に起こるようになった。ラベルが読めないのだから、行き先が明白な大口以外、荷物の配達は不可能になる。ネットに依存する流通企業は、早々に営業できなくなかった。

工場にある材料の在庫が尽きると、生産は停止する。自動発注システムでも、どこかに人が確認する工程が入る。人が了解しないと次に進まない。システムをバイパスして進めようとするエラーが出る。エラーの内容は読めない。生産できないから、モノは急速になくなる。あっても運べない。

給料の計算さえ全自動ではない。人間が入力する部分が滞り、しかも支払われる額が正しいか確かめる手段がない。やがてカード決済がエラーを出すようになる。買うことすらできなくなる。

数か月が過ぎると、クレジットは使えなくなり、現金決済が主流となったのだが、現金の価値も低下していった。奇妙なインフレだった。お金を数字で把握できなくなり、モノだけが高騰したのだ。通貨は、紙幣や貨幣の色や大きさで区別された。それでも、数えるには昔より時間がかかった。経済は崩れていった。トラブルが頻発し騒乱も起こった。巨大な人口を支えてきた、物理的なインフラが崩壊しつつあった。

「もつとアシスタントが普及してたら、なんとかなったんじゃないかな」

亮輔は音声アシスタントを使って、通話相手を探せることに気がついた。しかし、

端末用の通信網は、すでに不安定化しており頻繁に落ちた。どちらにしても、仕事は無くなり、通話の機会もほとんどない。

「けどね、できることは限られちゃうよ。読み上げは有効だけど、エクセルの表を読み上げさせて内容把握なんてできないでしょう」

音声はごく限られた部分にしか使えず、そこで問題が分かってても、解決手段までたどり着くことが困難だった。肝心の人間が修正できないのだ。

「AIが全部やれる時代になってたら良かったのにね」
重要なシステムでは、人間が最終判断をする。人間が混乱し、機械が判断を待つ間に、機械を支えるクラウドのサーバー群が死んでいった。

TVやネットが長時間休止し、季節が変わるころになると、多くの住人が都会から去っていくようになった。人が多すぎるし治安も悪い。食料確保などの将来性もない。少なくとも、田舎の方が安全だと考えたのだろう。戒厳令に近い規制下にあったが、政府は彼らを押しとどめなかった。

ガソリンは配給制になり、数か月のうちに手に入らなくなった。車を捨て、徒歩で

移動する人々が目立った。

しかし、亮輔と杏美は留まった。

「頼れる田舎があるのならまあいいけど、わたしらにはないからね。一から農業を勉強するのは昔より難しくなってる。本もメモもない。農機具や肥料や農薬や種も、たぶんもうない。家庭菜園じゃないんだ。ゼロから何かするなら、都会の方がまだよ」
文字に変わるシステム、記録方法を開発する試みがどこかで行われていたようだった。だが、記録ができない中で研究を続けるなど不可能だろう。噂はいつまでたっても噂のままだった。

「文字の代わりってなんだろう」

「うーん、インカ文明には文字がなかったというけど、紐を使った情報記録があったみたい。まあ帝国を維持するんだからそれぐらいはないとね。いまのわたしらの能力だと、それでも抽象的すぎて理解できないかもしれない」

「絵はどうなの」

「どうだろう。写真ならともかく、写実的な絵でも、絵と実物を結び付けるのは難し

い。写真そっくりの絵なんて、誰でも描けないだろうし。象形文字とかになると、もう記号だから無理だろうね」

一年が過ぎると、政府は統治能力を失った。治安要員や行政の官吏が、いつの間にかいなくなつた。解散したのか、移転したのか、二人にはよくわからないままだった。

ガスや水道、電気は早々に止まり、それらを失うと都市には人間を養う能力がなくなる。生活に必要な備蓄品がほとんど残されていないからだ。店舗の在庫など、数日分しかない。近郊の大きな流通店も同じだった。余分を持たない注文生産が、効率化の象徴とみなされてきた。

文字消滅以前のインフラが復活しなければ、維持できる人口は相応に減る。見た限りの人口は激減し、都市は街路樹が繁茂する森へと変わっていった。

数年間、二人は、小さなコミュニティを転々と渡り歩いて生活した。

落ち着いたのは、かつての図書館を根城にした小集団だった。図書館の中庭に畑を作り、どこから見つけてきたのか、鶏を飼っていた。ガラスが割れ、外観は荒れ果てた図書館だったが、所蔵の書籍を奥に退避させ、丁寧に保存していた。

本には今では何の価値もない。模様が印刷されただけの紙束なのだ。焚き付けにされたり、雨風に叩かれ、塵埃となっていく本を街中で幾度もみかけた。

ただ、この集団は残された本を守ろうとしていた。

「どういう意味があるのかな」

「将来役に立つと思ってる」

「またもとに戻るとのことなの」

「ここにいる何人かは、いつか終わると思ってる。流星の降った日に、彗星に含まれていたナノサイズのロボットが空中散布されて、それが人間の文字ソフトウェアをハックしたって言ってるの。視覚入力と文字認識をつなぐ回路がこわされたんだって。でも、いつかロボットは賞味期限を過ぎて動かなくなる、だからまた本は読めるようになる、ってね」

「それって……、電波系じゃないの」

「ふーむ、そうともいえる。根拠ないからね。でも彼らは人に危害を加えるわけじゃないから。本を守ろうとしてるだけだから」

本の保護について、亮輔は最小限しか手伝わなかった。杏美は協力しているようだった。もともと本好きだからだろう。

いつか二人には子どもができた。字を知らない初めての世代だ。親たちには教える教材も、手段もなかった。子どもはやがて成長し、何人かは親元を去っていった。集団はさほど大きくもならず、維持されていった。

夜になると、外から見えない一角で火が焚かれ、メンバーがそれぞれ本の一節を思い出しながら、唄のように朗誦した。ただ、断片的でまとまりはなく、あらずじなのか勝手な要約なのか、正確さが疑われる個人的な思い入れにすぎないようだった。とはいえ、それが新たな口承となった。

同じことを繰り返し、歳を重ねるうちに、図書館は建物の倒壊が危ぶまれるようになった。二人はもう老人の年齢になっていた。この世界で七〇歳は望めない。終わりのも近い。

平均年齢の上があったコミュニティーの人々は、それでも、近くにある地下鉄の入り口から本を地下に運び入れ、新たなサンクチュアリを造ろうとしていた。地下鉄の軌

道は途中でふさがっており、入り口さえ隠してしまえば、本は将来の世代のために封印できる。

二人が作業していたとき、遠くの村に移り住んだ子ども的一家が帰ってきた。はじめて孫の数人の顔を見た。文字など聞いたこともない第二世代だ。昔よりはるかに速いペースで世代交代が起こっている。

孫の一人は、亮輔のいくところなら、どこでも付いて歩き、扉の奥へ運ばれる本の山を見守った。孫は飽きずにその光景をながめていた。

*

祖父にはこの本が読めたのだろうか。

老人は祖父の言葉を思い出そうとしたが、もう大半は忘れてしまった。本の大切さを教えてくれたのは祖母の方だった。

どちらにしても、もう教わることはない。誰も知らないし、これから誰かが知るこ

ともない。老人はつぶやいた。

すると、孫の一人が本を手に、老人に声をかけてきた。

「じい、もらっていいかな」

「おお、どうするんだ」

「おもしろいんだ」

「何が」

「ほら、この模様だけど、ひとつひとつ分かれて見える。似ているものもあれば、違うものもある。おもしろい」

「おまえ、これを見分けられるのか」

「見分けてる、ってどういうことか知らないけど、違いがあるのは分かる」

それから孫は不可解なことを言った。

「じつと見ていたんじゃないんだけど、こう目をそらすと模様が頭に浮かぶようになる。ほらこの模様と、次の模様とかが」

老人は本を手に取ってもう一度眺めてみるが、何の見分けもつかなかった。

「お前は見込みがあるのかもしれないな。好きにしろ」

孫は嬉しそうな顔をした。

そのとき、本から小さな虫が飛び出した。それは松明の光で、一瞬銀色の輝きを放った。

「なに、これ」

孫は、素早く動く虫を手で押さえた。老人は言った。

「銀色の魚だ。本の模様を喰って生きている」